

あがり直る物也。又子あがりの鳩の、右のごとく煩ふには、予が案事の療治あり、銀鳩白子鳩に多く、右のとふりの煩ひ、子あがりに有、其折は子を取り出し、右のすりゑを飼、さて水を飼入か猪口などへ入口へおし付て呑せてよし、水を呑ならはぬ鳥子上り多く此煩ひ有、殊のほか其時よろこび水を呑もの也、一日に三度ほどづ、呑せたるがよし、尤銀鳩白子鳩の類、此わざらひにて落したり、六七年以前不計案事て如斯する時、一羽も落る事なく育なり、愚案の秘事也。

〔吾妻鏡十九〕承元二年十月廿一日丁亥東平太重胤號東所遂先途自京都歸參、即被召御所申洛中事等。○中略去月廿七日夜半、朱雀門燒亡、常陸介朝俊朝隆卿未孫、弓馬相撲達者、取松明昇門、取鳩子歸去之間、件火成此災、凡近年天子○土御門上皇鳥羽後悉令好鳩給、長房保教等本自養鳩得時、殊奔走云々。

〔日本紀略淳和〕天長七年十月戊申、一小鳩飛入永明門西廊。

〔日本紀略圓融〕天延三年三月十七日、夜亥時許、鵠滿天飛、其鳴聲似童子泣。

〔陸奥話記〕武則○清遙拜皇城誓天地言、臣既發子弟應將軍、○源賴義命志在立節、不顧殺身、若不苟死、必不空生、八幡三所照臣中丹、若惜身命、不致死力者、必中神鏑先死矣、合軍攘臂、一時激怒、今日有鳩翔軍上將軍以下悉拜之。

〔台記〕康治二年三月九日丙寅、參高陽院、新院德○崇進鵠脢報之以家鳩、長頭白色、頭有冠足有毛、性驕人。

〔吾妻鏡十七〕建仁三年六月卅日丙寅辰刻鶴岡若宮寶殿棟上、唐鳩一羽居頃之頓落地死畢、人奇之。

七月四日庚午未刻鶴岡八幡宮自經所與下廻廊造合之上、鵠三喰合、落地一羽死、九日乙亥辰刻同宮寺闕伽棚下、鳩一羽頭切而死、此事無先規之由、供僧等驚申之。

〔太平記五〕中堂新常燈消事

其比都鄙ノ間ニ希代ノ不思議共多カリケリ、山門ノ根本中堂ノ内陣ヘ、山鳩一番飛來テ、新常燈ノ油錠ノ中ニ飛入テ、フタメキケル間、燈明忽ニ消ニケリ、此山鳩堂中ノ闇サニ、行方ニ迷フテ、佛